Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

小松左京と日本未来学 : SFと並走する「未来」

徐, 翌

(Citation)
海港都市研究,12:43-59

(Issue Date)
2017-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010089

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010089

小松左京と日本未来学

― SF と並走する「未来」―

徐 翌
(Xu, Yi)

Ⅰ. はじめに

1960 年代から 1970 年代にかけて、京都大学人文科学研究所（京大人文研）の学者たちは、桑原武夫を筆頭に「新京都学派」と呼ばれるエコールを形成した。彼らは 1970 年の大阪万博開催を推進すべく、美術や建築を専門とする文化人らと協働した。この動向の中で形成されたのが、「日本未来学」である。SF 作家の小松左京は、このような動向に深く関与し、未来学の形成の中心を担った一人として挙げられる。本稿は、小松の文学表現や思想についてはいったん括弧に入れ、彼の文化行政やアカデミズムへの関与の過程を具体的に追跡することによって、日本未来学の全貌を明らかにするための研究ノートである。

追って参照してゆくが、万博前後における新京都学派の動向、岡本太郎を中心とする前衛芸術家の動向、或いはメタボリズム建築の動向については、これまでも多くの研究が蓄積されてきた。このノートは、そうした従来の研究が提供する諸々の情報を、小松を中心に据えることによって再編成し、彼が万博前後において「未来学」という旗印の下にどのような行動を展開したか、その委細を明らかにすることを目指す。

未来学（Futurology／Futures Studies）は、今日ではすでに死語となり、人々に忘れ去られつつある学問領域である。未来を予測することは困難だが、将来の長期トレンドを予測し、リスクを回避すること、或いは新たなチャンスを発見し、その対応を準備しておくことがその目的とされてきた。日本未来学の代表的著作としては、香山健一『未来学入門』［1967］や浜田和幸『知的未来学入門』［1994］等が挙げられる。浜田によれば、「先がどうなるか判らない、という人類共通の大前提があるからこそ、歴史や現状の分析から教訓を学び、未来を想像し、その達成への道筋を考え構築していくことが意味を持つ」。歴史に基づく未来の展望を見据えることこそ、人間にとって最

も大切な明日を生きる原動力になるのである、と浜田は述べ、「未来学」を「そのための具体的な方法、技術を総合的に」含み込むものとして定義している（浜田［1994:15］）。要するに、未来を予測できるものにするのは歴史の回顧と究明であり、未来学はそれに基づいて未来を考える学問として構想されたのである。

日本における未来学とは何であったのかを究明するためには、日本未来学の過去＝歴史を探ることが欠かせない。もっとも、香山の『未来学入門』をはじめとする未来学関連の著作に目を通すと、未来学そのもの発展のルーツや、今後の未来を予測してみるという未来学の性質を説明するもの、或いは、未来についての科学的予測を立てるものが多数を占めている。「未来学」が流行語となってから、死語となった現在まで、具体的にいかなる過程を経て日本未来学が展開されてきたのかに関する考察は多くない。

そうした中で、テクノロジー・アセスメント（TA）を専門とする吉澤剛の研究は、日本未来学の展開に関する歴史学的分析を行っている点で貴重である。吉澤も指摘するように、日本における未来学は、1960 年に始まり、東京オリンピックを経て万博開催の決定によりブームとなった。吉澤によれば、「1965 年からの未来学ブームは頂点を迎え、時代の変動とともに以降急速に収束してい」き、環境・公害問題、学生運動、オイルショック等の各方面で問題が目立つようになると、「学際的で大局観をもった未来学が、各学問分野へと発展的解消していった」とされる（吉澤［2012:795-798］）。

さらに、吉澤［2014］によると、日本人の未来の見方はあるべき将来像を描き、実現させるような「内発的」なものではなく、常に来る未来への対処法を考える「外発的」なものであるという。このように指摘する吉澤は、当時日本未来学の諸説を敷衍しながら、科学技術（イノベーション）と社会政策面に重心を置くことによって日本未来学の軌道修正を試み、「責任と想像力をもってありたい未来を示し自らを投げ込むことが、社会に要請される新たな役割である」（吉澤［2014:155-160］）と未来学研究の望ましい姿を提唱している。以下では吉澤の所論を踏まえ、未来学はいかに日本に根付いたのかについて、当時提起された様々な言説に即して考えていきたい。

まず、語源的には、“Futurology”は 1945 年、ドイツの政治学者オシップ・K・フレヒトハイムが打ち出した造語である（桃井［2013］参照）。後に和訳され「未来学」として定着するが、その源泉はヨーロッパにあると考えられる。19 世紀初頭、文明の進歩に感銘を受けた当時の人々は、未来への期待を抱くようになった。就中、未来学の出現に大きな役割を果たしたのは、科学に目を向けながら未来を舞台にする SF

（Science Fiction）の確立である。周知のように、「SF の父」と呼ばれるイギリスの作家 H・G・ウェルズは、常に科学技術を小説の中に取り入れ、未来世界を構築した作品を多く著し、未来についての予測を小説に著した。後に触れるが、1950 年代末には日本文学の世界にも SF 小説が出現し、脚光を浴びることになる。

ヨーロッパ諸国における未来学をモデルにしながら、日本の未来学ブームも SF 文学の繁栄と共振する形で到来した。日高晋はこの当時、外国も日本も「未来ブームの推進力であり中心的な担い手となっているのが SF である」と SF の影響力を認めている（日高［1967:54］）。なかでも、上下巻 400 万部を超えたベストセラー『日本沈没』を 1973 年に書き下ろした小松左京は、日本 SF 文学の牽引者にして未来学に深くコミットした最大の貢献者であると言える。このように、ある種の「相乗効果」が発揮された「日本未来学」と「日本 SF 文学」の成長過程において、そのキーマンとなった小松の活動を中心に、次節からは 1960 年代から 1970 年代までの未来学の展開を追いたい。

II. 始動する SF と「未来」--1960 年代前半

戦後の日本では英米の作品を中心に SF の紹介が進み、次第にその概念が一般読者に知られるようになった。日本 SF が始動する前、SF の存在がまだ知られていない時期から、既に SF の手法を導入して執筆活動を始めていたのが、安部公房であることはよく知られている。安部が『壁―S・カルマ氏の犯罪』（月曜書房、1951）を以て芥川賞（第 25 回）を受賞すると、当時京大で高橋和巳と同人誌活動していた小松は我がことのように興奮し、文学における SF の可能性に目覚めたという（小松［2008:46］）。1957 年、SF 同人誌『宇宙塵』が創刊され、1959 年 12 月に『SF マガジン』の発行が開始された。『SF マガジン』の創刊号を手にしてロバート・シェクリイの「危険の報酬」を読み、「眼をひっぱたかれた」ような衝撃を受けたと小松は回想している（小松［2006:13,2008:60］）。

1961 年、新人の抜擢を目的とする第 1 回 SF コンテスト（『SF マガジン』主催）が企画され、安部公房の推薦を得て、小松の投稿作品「地には平和を」（『宇宙塵』63 号、1963 年）が努力賞を受賞した。『宇宙塵』、『SF マガジン』両誌の執筆陣として名を連ねた小松、星新一、筒井康隆らは日本 SF 第一世代を形成し、1962 年には第 1 回日本

SF 大会が行われるなど、日本 SF は 60 年代初頭に本格的に確立された。

1963 年 3 月 5 日、当時『SF マガジン』の編集長だった福島正実の主導により、小松、石川喬司、星新一等の 11 名の SF 関係者の集まった「SF 作家クラブ」が結成された。プロの SF 作家団体の出現が日本 SF 文学を鼓舞し、「SF への危機感と純文学への対抗意識」（小松［1997:113］）が SF 作家たちの中に覚醒し始めた。1963 年 7 月に『オール読物』に進出した小松は、「紙か髪か」というタイトルの短編小説を発表した。その内容は突然異変を起こした細菌によって、世の中から全ての「紙」が消え失せてしまうというものだったが、この作品は SF に対して否定的な持論を持つ吉田健一に認められ、小松は大いに励まされたという（小松［2006:59,2008:62］）。

一方、当時日本社会にキーワードとして浮上してきたのが、「情報」である。この動向の中心を担ったのが、新京都学派の一人である梅棹忠夫であった。大阪朝日放送から発行されていた PR 誌『放送朝日』（1963 年 1 月号）に掲載された梅棹の「情報産業論」は、改稿後『中央公論』同年 3 月号に転載され、忽ちセンセーションを巻き起こした。小松はこの論文に機敏に反応し、のちに「当時は概念の新しさに世間はびっくり仰天した」（小松［2008:68］）と回想する。『放送朝日』は 1966 年 7 月まで「『情報産業論』の展開のために」を題して特集を組み、20 回にわたって情報社会について議論を深めていった。小松はこの頃、1963 年 9 月から 66 年まで 4 年間続けて、SF ルポ[1]「エリアを行く」（後に単行本『地図の思想』［1965］、『探検の思想』［1966］にまとめられ、『妄想ニッポン紀行』［1973］として文庫化されている）を『放送朝日』に連載していた。同誌を介して梅棹と知り合った小松は、当時梅棹が自宅で毎週金曜の夜に開いていた「金曜サロン」に顔を出したという（小松［2008:68］）。

1964 年には、小松の処女長編作『日本アパッチ族』が光文社から刊行された。失業が罪に問われるパラレルワールドを設定し、現実と異なる 1960 年代の日本を舞台に「鉄棒を食べる人種」を登場させた作品である。小松の初の長編作品が他社により刊行されたことに激しく反応した早川書房の福島正美は、小松、筒井、星らに原稿を依頼し、日本 SF 第一世代にとって一つの頂点をなす叢書「日本 SF シリーズ」の編纂を始めた[2]。

1　小松は「SF ルポ」という自家製のジャンルについて、「イメージの旅」であり「形容矛盾の紀行文」であると説明している（小松［1973:663, 2008:66］）。小松によれば、「実際に現地を取材した成果はそのまま使いながら、道中や登場人物の設定で遊ぶ」のが SF ルポであり、これが「一種のフィールドワークとして僕の日本論の基礎になっている」という（小松［2006:76］）。

2　石川［1977］、巽［2000］、小松［2006］［2008］、長山［2009］等に、『日本アパッチ族』に対

小松の『日本アパッチ族』は、未来に関心を持つ関西在住の有志たちが集うきっかけの一つともなった。例えば、新京都学派の一人である加藤秀俊の自伝『わが師・わが友』［1982］には、アメリカでの一年間の滞在で日本事情に疎くなった加藤が、「読むべき本」を訪ね回ったところ、「必読の書」として『日本アパッチ族』を勧められ、読後「小松左京という人物につよく惹かれた」（加藤［1982:129］）という挿話が記されている。小松は『放送朝日』の編集部に出入りしているうちに、同誌に原稿を執筆していた加藤と知り合い、交遊を深めていった。このように、意気投合した梅棹、加藤と小松の三人はしばしば集まり、SF 的な発想と人類学や社会学などの構想を交え議論をよく行うようになった。

かくして当時、「情報産業論」を掲載した『放送朝日』は京大人脈を集結させ、未来を考察する論壇の構築に一役買ったと言える。赤上裕幸は『放送朝日』を「電波論壇」と捉えた上で、「その視点が常に時代の最先端領域に向けられ、未来について語る場が確保されていった」と分析している（赤上［2014:275］）。小松が汲んでいた所謂「文化研究」の潮流としては、桑原武夫が率いる京大人文研の比較文化研究の流れに加え、『放送朝日』を中心に形成されたこの知的潮流を看過すべきではない。SF 的な発想と京大人文研の「文明の思考法」[3]という二つの感覚に跨った小松は、未来を語るにはうってつけの人物だったわけである。

1964 年、東京都は再開発をスピーディーに進め、国際社会への復帰を意味する東京オリンピックを開催し、日本国民に自信をもたらしていた。小松はこれを「この挙国的なお祭りさわぎは、本来異常事態」であると批判的に捉え、当時の日本の新たな国際社会における位置づけに問題意識を持ち始める（小松［1994:169］）。小松が大阪万博に関与したのは、このような問題意識に因っている。後年の回想によれば、新聞で大阪が東京に次ぐ「国際博」を催すというような記事を見たのが事の始まりとなり、『放送朝日』を拠点とする関西の「文化研究」に身を置いたことが、小松が万国博に関与した契機であるという（小松［1994:154］）。

万国博に興味をそそられた小松は、そのための研究会の立ち上げを持ちかけ、梅棹、

する福島の反応が言及されている。

[3] 新京都学派におけるこのような思考法は、いわば日本を世界情勢の中に置き、西欧、アジア（中国、朝鮮等）、日本の基層文化という三つの視点を移動しながら、フィールドワークなどの考察を経て学際的な共同研究を行い、歴史・現在・未来の要素を合わせて考えるところに特質がある。「新京都学派」という呼称の由来には明確なルーツはないが、小松左京が『日本』（講談社、1965 年 2 月）に発表した論文「新京都学派の土着主義」に印象づけられたともいわれる（竹内［2014］）。

加藤と当時『放送朝日』の編集長だった仁木哲のグループの賛同を得た（小松［2006:81］）。同年 7 月頃、京都に参加者が集まり、上記四名のほか川喜田二郎、多田道太郎、鎌倉昇も発起人に加わって、「万国博を考える会」（略称「考える会」）が成立に至った。同会では、加藤は資料収集をし、梅棹は文明史を徹底的に考察し、川喜田は国際協力の側面で考え、鎌倉は経済的な発想をもち、多田は大衆文化の知識を取り入れるなど、それぞれの分野から自由な意見交換が行われた。小松は人類文明史の中で、日本を古今東西の背景に置き、偏らずに日本を位置づけ、日本の未来を覗こうとした（小松［1994:176］）。

こうした動向に並行し、SF ルポを続けた小松は、オリンピックでインフラ整備と都市開発に注力した東京を中心とする日本の変化を目の当たりにし、未来社会の構図や十年後の日本はどんな変化を遂げるかについての関心を高めた。「考える会」の議論は始めは自発的に「万国博」について資料調査を行い、意見交換をする在野の研究団体だったが、討論を広げていくうちに、次第に未来学の方へと集中していった。この会は万博の非公式ブレインに当たる組織となり、68 年に結成される「日本未来学会」と並走することになる。以上のように、読者が頷ける SF 文学作品が出現し、未来に関心を向ける「万国博を考える会」が登場した 1964 年は、日本 SF 文学にとっても、日本未来学にとっても記念碑的な出来事が続出した年であった。

III. 未来学ブーム--60 年代後半

1965 年、万博の大阪開催が正式に決まり、名称は「日本万国博覧会（EXPO'70）」、会期は 1970 年 3 月 14 日から 9 月 13 日までの 183 日間となった。4 月に成立した国際博準備事務局（BIE）は上記「考える会」をアドバイザーに迎える。続く 11 月に元東大総長の茅誠司を委員長に、桑原を副委員長にした「テーマ作成委員会」が発足する。桑原に招かれた小松、加藤、梅棹はこのコンセプト作成に携り、結果として、「人類の進歩と調和」というテーマが決定することとなった。翌 1966 年 3 月、小松は正式にサブテーマ委員会に名を連ね、委員会で当時経済企画庁研究所長だった林雄二郎、建築評論家の川添登と知り合い、親しくなる。5 月、サブテーマ委員会の作業が終り、一旦万博の仕事から解放された小松は加藤、梅棹らとモントリオール博覧会の見学を行なった（小松［1994:199-238］）。

帰国後、小松は『週刊朝日』（1966 年 9 月 30 日）での梅棹との対談「“未来屋”大いに未来を語る」で、「未来学」の研究を提案した。これが日本における「未来学」という言葉の始まりだと考えられる。科学技術の急速な進歩を目にしている文化人にとって、自然と人間、文明と人間との関係、今後の日本に起こる変化は切実な問題だった。万博だけでなく、より大きいスパンで総合的に考える必要が生じたため、小松は「未来学」をそれらの問題を究明する「ツール」として提唱したのである。

その提案を受けて、林と川添がすぐさま反応した[4]。エッソ・スタンダード石油のＰＲ誌『Energy（エナジー）』が斡旋し、小松、梅棹、加藤、林と川添の五人は比叡山ホテルで一晩中議論を重ねた上、特集号『未来学の提唱』［1967］を日本生産性本部から出版し[5]、同時に「未来学研究会」（通称「貝食う会」）が結成されることになった[6]。

1967 年に入り、日本国内で未来学を議論するシンポジウムや学会などが多く行われ、未来論の大流行が起きた。「未来学研究会」が結成されてまもなく、日本科学技術連盟が主催した「未来学シンポジウム」が 7 月 14 日から 3 日間行われ、小松は招待討論者として出席した。続く 9 月 25 日、「21 世紀の世界」という日本初の国際会議が東京の日経ビルで始まった。この会議は日本経済研究センターの理事長であった大来佐武郎の主催したものであり、海外からデニス・ゲイバーらが、日本側からは一橋大学名誉教授中山伊知郎ら多数の未来学者が参加した。ほぼ同時期の 9 月、「人類 2000 年委員会」がオスロで開かれた。代表として加藤と林は第一回国際未来学会となるこの委員会に参加し、感銘を受けた二人は第二回国際会議を日本で催すと宣言する。当時、未来学を研究する国は少なくはなかったが、日本の未来学は素早く国際的な交流に参加し、欧米諸国と並んで先端を走ることになったのである。

ちなみに、丹下健三を議長とする世界デザイン会議（1960 年）を機に開始された「メタボリズム・グループ」の建築運動と小松が関係を持つようになったのも、この時期

4　林は 1966 年経済企画庁に在籍していた「未来志向」の学者たちがメインになる「ビジョン研究会」は 20 年後の社会がどうなるかを見据えて報告書をまとめ、発表した日本未来学の端緒を切った一人でもある（林［1966］）。

5　（財）日本生産性本部は、「生産性向上対策について」の閣議決定（1954 年 9 月 24 日）に基づき、1955 年 3 月 1 日に設立された（財）日本生産性本部を母胎に、1973 年 11 月 12 日に同生産性本部から分離独立（社団法人認可 1976 年 12 月 20 日）し、1994 年 3 月 31 日に解散した(社)社会経済国民会議を 1994 年 4 月 1 日に統合して発足した非営利法人である。社会経済国民会議のシンクタンク機能を継承し、産業界を中心とした生産性運動をより社会的視座で捉えた運動展開を目指している。（日本生産性本部ホームページ–財団概要より）http://www.jpc-net.jp/others/

6　「貝食う会」の結成の経緯については、梅棹［1997］、加藤［1982］、川添［1996］、小松［2008］、林［1995］の同会のメンバーだった五人の自伝にそれぞれ記述されている。小長谷［2012］にも言及がある。

である。メタボリズム・グループとは、川添登、黒川紀章、浅田孝等の建築家で構成され、「成長、変化、代謝、流動性など時間概念」を建築・都市デザインに導入した「建築・デザインの運動グループ」であり、未来都市の建設ビジョンを提示し、日本建築家の先鞭をつけた建築運動を展開した（小林［1993：61］）。小松は川添、加藤、川喜田を誘い込んで『シンポジウム　未来計画』［1967］を編み、また、黒川をモデルとする「白山喜照」という主人公が日本全土を回る紀行文『日本タイムトラベル』（日本交通公社、『旅』、1968 年第 1 号～第 11 号連載）を出版している。小松は積極的に彼ら若手建築家の視点を自分の作品の中に取り入れる試みをしていたと言えるだろう。

1968 年 7 月 16 日、国際未来学会の準備を進めるため、「未来学研究会」をもとに「日本未来学会」がその受け皿として立ち上げられた。初代会長には中山伊知郎が選ばれ、発起人には、大来佐武郎、丹下健三、今西錦司、浅田孝、平田敬一郎らが名を連ねる。エコノミスト、建築家、芸術家、人類学者等の各領域の専門家を招集したこの学会の学際的な性格が窺える。「日本未来学会」の成立は、日本の未来学にとってシンボリックな出来事であり、さらに日本未来学の流行に拍車をかけることになる。ここで、当時の日本の未来学はどのようなものだったのかを改めて確認しておきたい。

まず、未来学研究は海外から翻訳された書籍に触発されている。加藤秀俊は、未来学に影響した書籍として「フラスティエの『四万時間』、ゲイバーの『未来を発明する』、ヤングの『メリトクラシー』、コールダーの『二十年後の世界』、ＮＨＫ文研の『放送する未来像』」を挙げ[7]、「総理府は 1967 年 1 月しめ切りで「二十一世紀の日本」論文を募集した。まさしく『未来ブーム』である 」と、当時の未来学の流行を観測している（加藤［1967:10］）。殊に、総理府がそのブームに加担したことは、日本の未来学に行政的な任務を付与したことを意味するだろう。だが小松は、それを政府の「不景気の口なおし」（小松［2006:168］）だと洞察し、未来学が当時のマスメディアに「バラ色」で描かれ、政府もそれに便乗したことに疑念を呈していた。

1960 年代後半の日本では、国内で相次いで発生した地震や噴火といった天変地異のほか、公害問題による被害、訴訟などの環境問題と相俟って、アメリカとソ連の冷戦状態が続き、核軍拡と宇宙開発競争が日増しに激化するなど、国際環境も不安定だった。そんな光景を目にしつつ、オリンピック後の高度成長に違和を覚えた文化人たちが未来に疑問を抱いたことが未来学研究を促したと考えられる。当時の小松は日本論

---

7 フーラスティエ［1965］、ゲイバー［1966］、ヤング［1965］、遠山［1966］および NHK［1966］である

において、「未来に対する危機意識、未来に対する不安」が未来問題の源泉になっていると繰り返し強調していたのである（小松［1970:230］）。「未来学研究会」や「未来学シンポジウム」などの座談会に出席した小松は、1966 年から翌年にかけて、『未来図の世界』［1966］、『未来怪獣宇宙』［1967］、『未来の思想—文明の進化と人類』［1967］など、「未来」に関するノンフィクションを多く著した。

「未来学研究会」の五人座談会「なぜ未来を考えるのか」の議論によれば、日本で未来学が台頭してきた背景は、政治・経済面で変化が起きたため未来の見通しが立たなくなること、科学技術の進歩により人々の信じてきたものが幻滅すること、外国の未来論研究の翻訳と紹介がなだれ込んだことにあるとまとめられる（林他［1967］）。概して彼らは、未来学を科学と宗教などの倫理的な問題から出発した文明論的視点から見ていたと言えるだろう。他方で、政治構造の変化に踏み込まずに精神面の分析を専らとしたため、現実からの乖離を引き起こしてしまっていた点は、初期段階の未来論における盲点でもあった。

実際、既述のように日本における未来学へのアプローチは、「金曜サロン」や「考える会」を皮切りに、文化・科学・経済・建築などの様々な側面においての動きが見られる。しかし、未来に関する研究は領域ごとに展開されていった議論にとどまり、やがてまとまりを失って各自の展開を求めるという一途を辿ることになった。出発早々ブームとなった日本未来学には、実際には不穏な要素が始めから胚胎されていたのである。

Ⅳ. 政治的道具として--大阪万博

1970 年 3 月 14 日、日本万国博覧会が大阪で盛大に開催された。アジア初のこの国際博覧会は半年間以上続き、77 ヵ国 4 国際機関が参加、会期中の入場者は目標数を上回る 6422 万人に達し、大成功を収めることになる。「未来」に対する時代の「情熱」が一気にこの国際的なイベントに集中されたといえよう。小松は岡本太郎が総合プロデューサーを担当するテーマ館「太陽の塔」のサブプロデューサーに任命された。

テーマ館は空中・地上・地下の三次元の空間を設け、それぞれ未来・現在・過去を主題としている。川添は空中部門を担当、小松は地下展示「過去＝根源の世界」を請け負い、生物の進化を象徴する「生命の樹」を構想した。DNA 構造を拡大し、45 メ

ートルの高さを持つ立体模型として作られた「生命の樹」は、すべての生物が繋がっていることを表している。それは「映画の特撮も駆使してゴジラや恐竜なども現れ、最後に人間が登場する」という生命の進化過程の提示を目指す小松の意思の表れであった（小松［2008:71］）。

だが、そのような小松の考慮とは裏腹に、大阪万博には別の思惑が含まれていたことにも注意する必要がある。椹木野衣は『戦争と万博』において、戦争美術の視点から大阪万博に集約された前衛芸術をひも解き、戦後の芸術家たちのビジョンを明らかにしている。椹木は丹下と共同で「お祭り広場」を手がけた建築家の磯崎新に注目し、彼が打ち出した「未来都市は廃墟である」というコンセプトを説きながら、「来るべき未来社会のプレゼンテーションのために実現されたお祭り広場は、開会式の時には、すでに『未来都市の廃墟』と化していた」と、万博の夢見た未来が既に実現不可能なものとして認識されていたことを指摘している（椹木［2005:134］）。万博閉幕後数日後には会期中に来場者の目を奪った印象的な建物が次々と消え去り、代表的な建築物エキスポタワーも取り壊され、「生命の樹」が封鎖された「太陽の塔」の内部に公開されることなく眠ったままになっていることが示すように、万博記念公園はいわば廃墟の象徴である。未来を象徴する一群の建物は、始めから廃墟化することを前提に建設されたのである。

1960 年代に高度経済成長を遂げた日本は、自分の成長を確認できる場所を探し出すことに懸命だった。小松らが万博の研究を続けつつも、正式組織委員会への参加を拒んできたのは、このようなプロパガンダ的な万博の性格を察していたからだと考えられる。小松の予測通り、通産省輸出振興課に起案された万博は「勧業博」（小松［1994:184］）の性質が鮮明で、都市開発と公共事業への投資という役割を期待されるものであった。

小松は万博開催前夜の慌ただしさを「現場では強行スケジュールの連続下に「戦争」がはじまっていた」と喩えながら、「すこし疲れ、すこし年を取ったような感じがした」と、万博のプロジェクトに関わった当時の虚脱感を表白している（小松［1994:259-261］）。磯崎新も同様に、「戦争遂行に加担してしまったような、疲労感と苦い思いを味わった」と当時について述懐する（磯崎［2009/5］）。小松と磯崎はこのように、大阪万博を敗戦した日本が名誉挽回のために仕掛けたもう一つの「戦争」として感受していた。

既に多くの指摘があるように、大阪万博は 1940 年に東京で開催される予定だったが、

日中戦争の状況悪化などの出来事により取りやめられた「紀元 2600 年記念日本万国博覧会」の復活だった[8]。吉見俊哉は、万国博が開催する都市の名称で命名の慣例を破った「日本万国博覧会」という異例な呼び方が、「シンボルとしての『日本』を全面に揚げた」ものであることを指摘し、その開催の背後にナショナリズムの影があったことを明らかにしている（吉見［2011:62］）。

さらに、小松は論文「万博から公害へ――未来学の新しい段階」［1970］で、川添が企画を担当した「空中テーマ展示部門」が、元々「人間の文明による生物的環境の破壊に対する警告」といったような展示構想を含んでいたにもかかわらず、この構想が破棄されたという興味深いエピソードを記している。大阪万博は非政治的な糖衣をかぶせながら、日本の成長を世界に向けて発信するという政治的役目を持つイベントであったのである。

ところが、このような政治的性格を付与された大阪万博に際し、SF 作家の多くは企業館側の設計に加わり、未来への思いを注ぐことを選択した。手塚治虫はフジパン・ロボット館のプロデュースを担当し、星新一は東宝の映画プロデューサーだった田中友幸が担当する「三菱パビリオン」の出展構想に協力した。後者の起案グループには、福島正美のほかに SF 作家・翻訳家の矢野徹、SF 小説のイラストで知られる真鍋博ら、複数の SF 関係者が集まっていた（馬［2014:35-39］）。「日本の自然と日本人の夢」というテーマが決まり、この展示館は「三菱未来館」と名付けられた。50 年後の日本の海底状況や海底資源開発あるいは技術による宇宙開発などの未来を展望する SF 的な特徴が盛り込まれたパビリオンであった。

星新一は「未来学研究会」に加わらなかったが、小松らに招かれた座談会や対談では未来について饒舌に語り、「未来ルポ東京 1980 年の戦慄 (公害は人間を腐蝕する)」と題する未来論の深層にある危機を論じた文章も残している（星［1969/3］）。また、前衛文学を牽引してきた安部公房は、「鉄鋼館」の展示企画顧問となったほか、益々スピードアップする未来社会で神経反応加速剤の発明にまつわる SF 的な悲喜劇『一日二四〇時間』を執筆した。この作品は、勅使河原宏監督によって映画化され、「自動車館」の第二パビリオンで四面のスクリーンを用いて放映されている[9]。

如上の SF 構想が含まれた万博の開催は、科学技術の現状と未来への予測を展示し、未来学を盛り立てた。岡本太郎ら前衛芸術家にとって、大阪万博は芸術理念を発揮す

8　この点については吉見［2011］のほかに、椹木［2005］大澤［2009］も指摘している。
9　椹木［2005］、橋爪［2010］、長山［2012］、馬［2014］を参照。

るに恰好の「場」でもあった。建築界からも、マスタープランに真っ先に関わった浅田孝をはじめとして、テーマ館・東芝 IHI 館に参入した黒川紀章、同じくメタボリズムの粟津潔らが活躍した。馬定延は、大阪万博における「アート&テクノロジー」のビジョンの「互恵的で自発的な出会い」に注目し、これが前衛芸術の継承の場となったことを強調している（馬［2014:43-45］）。万博はまさにそのような「出会い」を作る装置であった。こうした動向のなかで、SF 作家は「万博」という洗礼を受け、SF の普及を考える機会を手に入れ、SF の表現手法を現実世界で実践したのである。

V. 1970 年--「未来」から「終末」へ

大阪万博で賑わう 1970 年 4 月 10 日から一週間、加藤秀俊を事務局長とし、日本未来学会主催の国際未来学会議が京都国際会議場で開かれた。「未来からの挑戦」をテーマとするこの会議には 32 ヵ国、28 の未来研究団体が参加した。先進国と途上発展国が共に出席したのはこの会議が初めてである。万博の仕事を終えた小松は、スライドと音楽を合わせたこの会議の開幕ショーにも登場した（朝日新聞夕刊［1970］）。

その傍ら、小松は国際 SF シンポジウムの開催に取り組んだ。イギリスの SF 作家ブライアン・オールディスが遠藤大也の招きで万博開催期間に日本を訪れ、シンポジウムの開催を持ちかけたことが、そのきっかけである。資金不足のため、『宇宙塵』の編集長・柴野拓美と相談した結果、シンポジウムは日本 SF 作家クラブと共催されることとなり、実行委員長を担当した小松は、各出版社に走り回り資金の工面に努めたという。8 月 29 日から 6 日間で東京・名古屋・京都で行われ、アーサー・C・クラークをはじめとして世界各国の SF 作家・学者が来日する一方で、日本 SF 界からは、星、福島、石川、柴野のほか、豊田有恒、眉村卓等が参加したほか、安部公房や手塚治虫らも集まった。会期中、作家たちは万博会場にも案内されたという（長山［2012:135］, 小松［2006: 119-122］,SF マガジン［1970/8:14］）。開催を前に、星新一は、日本で実現するソ連作家と英語圏作家との接触が SF 界における「画期的な出来事」であると述べ（星［1970］）、オールディスはこのシンポジウムを SF を仲人とする「東西の結婚式」であると評した（SF マガジン［1970/10:21］）。

しかし、この 1970 年を分岐点として、日本未来学は急速な衰退を迎えることになる。『朝日新聞』を例に見ると、1972 年 6 月 28 日朝刊に「危機感が探求促す」という副

題の記事が掲載され、70 年以前の「バラ色」未来論とは対照的に、公害問題に矛先が向けられ、文明の観点から各分野を包含する未来学の研究方法に期待が寄せられている。ところがこれ以降の『朝日新聞』紙上では、未来学は殆ど話題に上ることがなくなった。

かくて、「日本未来学会」の創設メンバーらはそれぞれの専門領域へ回帰する方法で未来学の存続を図ることになる。1969 年、「産業予測特別調査団」がアメリカにシンクタンクの実態調査を持ち帰り、日本でのその必要性を提言した[10]。真っ先に組織されたのが、「トータルメディア開発研究所」と「CDI」という、大阪万博の産物とも言える二つの文化系シンクタンクである。1970 年末にほぼ同時に成立したこの二つの株式会社は、前者は小松とメタボリズムの建築家たちが中心を担い[11]、後者は加藤と川添が携わった知的共同体である。以降、未来学は各分野への分散によって形が崩れていくこととなる。

こうして熱が去っていった未来学の代わりに、小松左京が傾斜したのが、「終末論」であった。1973 年 6 月、筑摩書房から隔月刊『終末から』が創刊された（9 号で終刊）。執筆陣をなしたのは、小松のほかに、井上ひさし・野坂昭如といった面々である。近年続く天変地異、公害問題をクローズアップしつつ、1966 年に成田空港の建設反対問題や 1972 年のあさま山荘事件の長い攻防戦等の左翼セクトによる内ゲバ事件へも目配りをしており、総じて「破滅」「終末」の論調を軸にした異色な雑誌となった。

また同年 11 月、祥伝社から五島勉の著作『ノストラダムスの大予言』が出版され、翌年に映画化された。書中の「一九九九の年、七の月/空から恐怖の大王が降ってくる/アンゴルモアの大王を復活させるために」（五島［1973:30-31］）という予言に添い、五島は史料等を引き合いに出しながら、環境汚染や核兵器などを予言の例証として提出している。「迫りくる 1999 年 7 の月、人類滅亡の日」という副題の通り、本書は人類滅亡説をセンセーショナルに紹介した一作であり、より一層世間に終末のイメージを植え付けた。こうして 1973 年、未来学の後退と軌を一にして終末論がブームを迎えたのである。

だが、未来学ブームが十年にも足らずに衰え、終末論ブームに転じてしまったのはなぜなのだろうか。本間長世は 1969 年の論文「未来論と終末論」において、これら二

---

10 「未来工学研究所」HP を参照。http://www.ifeng.or.jp/about/history/

11 機関誌『季刊 MEDIA 予兆』（2 号まで）に小松らは寄稿をしている。（小松左京「予兆 地球時代への地平線」1975 年 6 月）。トータルメディア開発研究所は国立民族学博物館の構想・設計をも手がけた。

つの思潮をイデオロギーの終焉という思想界の動きと関連付け、両者の共通性を論じている。本間は安保闘争という政治的動乱と距離を置き、起こりうる未来へと目を向けた学者たちの行動が「政治そのものからの転向」だと考え、「未来学には、ユートピア主義が持っている、社会からの政治の消去という側面があるからである」と説明している（本間［1969］）。こうした視点は、後に大澤真幸が 1960 年代末期の学生運動について「政治的な具体性を欠落させ美学的な装いを帯びることとなる」と論じ、時代の自己否定のスタンスの影響下で終末的な想像力が氾濫したと指摘したこととも共通しているだろう。

万博に深くコミットした小松左京が、政府の描くバラ色の未来像に違和感を持っていたこと、また万博の中にすでに「廃墟」のイメージが含まれていたことは、すでに確認した。いわば、「終末」の伏線を埋め込んだところからスタートした日本未来学は、終末論に与することを以て新たな展開を図ろうとしたのではないか。小松が 1973 年に上梓した『日本沈没』は、実は彼が未来学に傾倒し始めた 1964 年に起稿されている。『日本沈没』に提示された「終末」のヴィジョンは、実は未来学の構想とともに育まれたものだったのである。以上の本稿において整理したコンテクストを踏まえつつ、この作品についての具体的な検討は今後の課題としたい。

参考文献

赤上裕幸 2014 「『放送朝日』―戦後京都学派とテレビ論壇」竹内洋他（編）『日本の論壇雑誌: 教養メディアの盛衰』創元社,271-292.

朝日新聞夕刊 1970/04/10 「国際未来学会議開く 京都 世界の 32 国が参加 国際未来学会議」

朝日新聞朝刊 1972/6/28 「問い直される未来〈27〉:危機感が探求促す」.

石川喬司 1996 『SF の時代:日本 SF の胎動と展望』双葉文庫.

磯崎新 2009/05/19「私の履歴書：建築家磯崎新氏（18）開幕前夜――陛下の暖房にロボット」日本経済新聞朝刊.

梅棹忠夫 1997 『行為と妄想 わたしの履歴書』日本経済新聞社.

NHK（日本放送協会総合放送文化研究所）（編） 1966 『放送の未来像』日本放送出版協会.

SF マガジン 1970/8 「国際 SF シンポジウム趣意書–SFS 委員会事務局」早川書房（日本ＳＦ作家クラブ編)。巽孝之（監修） 2015 『国際 SF シンポジウム全記録 冷戦以後から 3・11 以後へ』彩流社に再掲.

SF マガジン 1970/11 「緊急特別取材 国際 SF シンポジウム 速報レポート」早川書房（日本ＳＦ作家クラブ編)。巽孝之（監修）2015 『国際 SF シンポジウム全記録 冷戦以後から 3・11 以後へ』彩流社に再掲.

大澤真幸 2009 『虚構の時代の果て』筑摩書房.

加藤秀俊 1967 「未来への姿勢」『世界』(254) , 210-221 岩波書店。林雄二郎等（監修） 1967 『未来学の提唱』日本生産性本部に再掲.

加藤秀俊 1982 『わが師・わが友―ある同時代史』中央公論社.

川添登（著）真島俊一他（編） 1996 『思い出の記』 ドメス出版.

ゲイバー, デニス（英）（香山健一訳） 1966 『未来を発明する』竹内書店新社.

小長谷有紀編 2012 『梅棹忠夫の「人類の未来」：暗黒のかなたの光明』勉誠出版.

小松左京 1966「「21 世紀論文」への怒り」『未来図の世界』 講談社。城西国際大学出版会（編） 2006 『小松左京全集完全版 (28)』, 168-171 に再掲.

小松左京 1970/5 『ニッポン国解散論』読売新聞社.

小松左京 1970/12 「万博から公害へ――未来学の新しい段階」『自由』12(12),42-51.

小松左京 1973 『妄想ニッポン紀行――高天原–伊勢–出雲』講談社文庫.

小松左京 1994 『巨大プロジェクト動く―私の「万博・花博顛末記」』廣済堂.

小松左京 1997 『SF への遺言』光文社.

小松左京 2006 『SF 魂』新潮社.
小松左京 2008 『小松左京自伝―実存を求めて』日本経済新聞出版社.
小林浩一 1993 「ハイテック」宮内康他（編）『現代建築:ポスト・モダニズムを超えて』新曜社, 58-63.
五島勉 1973 『ノストラダムスの大予言―迫りくる 1999 年 7 の月、人類滅亡の日』祥伝社.
椹木野衣 2005 『戦争と万博』美術出版社.
竹内洋 2014/1/29「学問の世界のフィールドワーク」紀伊國屋書店書評空間 http://booklog.kinokuniya.co.jp/takeuchi/archives/2014/01/post_2.html#trackbacks 最終閲覧 2017/1/12.
巽孝之（編）2000 『日本 SF 論争史』勁草書房.
田中角栄 1972 『日本列島改造論』日刊工業新聞社.
遠山啓（コールダー編、赤木昭夫・須之部淑男共訳） 1966「二十年後の世界」『世界』250, 258-261.
鳥羽耕史 2010 『小松左京『日本沈没』とその波紋 ： 高度成長の終焉から「J 回帰」まで』日本文学 59（11）,14-26.
長山靖生 2009 『日本 SF 精神史――幕末・明治から戦後まで』河出書房.
長山靖生 2012 『戦後 SF 事件史―― 日本的想像力の 70 年』河出書房新社.
日本生産性本部 http://www.jpc-net.jp/others/最終閲覧 2017/1/12.
橋爪紳也（監修） 2010 『EXPO'70 パビリオン:大阪万博公式メモリアルガイド』平凡社.
浜田和幸 1994 『知的未来学入門』新潮社.
林雄二郎等（監修） 1967 『未来学の提唱』日本生産性本部,67-89.
林雄二郎 1995 『日本の繁栄とは何であったのか:私の大正昭和史』PHP 研究所.
林雄二郎・ビジョン研究会（編） 1966 『20 年後の日本 ： 豊かな国民生活への一つのビジョン』日本生産性本部.
日高晋 1967 「未来ブームの中の「未来学」」『展望』（105）, 54-57.
フーラスティエ，ジャン（仏）（長塚隆二訳） 1965 『四万時間:未来の労働を予測する』朝日新聞社.
星新一 1970/08/27『SF と文明　想像を超える現実　日本での国際シンポジウムを前に』読売新聞夕刊.
本間長世 1969 「未来論と終末論」『中央公論』 84（5）, 126-136.
馬定延 2014 『日本メディアアート史』アルテスパブリッシング.
未来工学研究所 http://www.ifeng.or.jp/about/history/最終閲覧 2017/1/12.

桃井治郎 2013 「未来学の誕生」桃井治郎他（編）『近代と未来のはざまで―未来観の変遷と 21 世紀の課題』風媒社,67-75.

ヤング，マイクル（英）(伊藤慎一訳) 1965 『メリトクラシーの法則』至誠堂.

吉澤剛 2012 「未来学の考古学」『年次学術大会講演要旨集』27, 795-798 http://hdl.handle.net/10119/11141 最終閲覧 2017/1/12.

吉澤剛 2014 「特集に寄せて：あらためて「未来」を語る」「日本の未来の担い方」（〈特集〉日本の未来の担い方）『研究技術計画』28（2）, 150-162.

吉見俊哉 2011 『万博と戦後日本』講談社.